８－６

主題	相互訪問形式による世代間交流への取り組み
副題	「倉田のおばあちゃん一座」の紙芝居を始めるよ

キーワード１ 世代間交流	キーワード２ 相互訪問形式	研究(実践)期間	５ヶ月

法 人 名	社会福祉法人　品川総合福祉センター
事業所名	大井在宅サービスセンター
発表者（職種）	吉川直人（介護福祉士）
共同研究(実践)者	茂木洋子（介護福祉士）、磯辺美佐子（介護福祉士）、宮森裕子（介護職員）、他

電　話	03-5742-2721	ＦＡＸ	03-5742-2724

今回発表の事業所やサービスの紹介	大井在宅サービスセンターは品川区大井町倉田町に平成 6 年開所したデイサービスである。同施設内で通所介護、認知症対応型通所介護、居宅介護支援を展開している。音楽、手芸、書道、カラオケ、体操、入浴等の活動を本人自身が選択し、参加されている。認知症カフェや介護者教室の事業も実施している。

《１．研究(実践)前の状況と課題》

デイサービスである当事業所は、数年来、近隣の保育園との交流を行ってきた。ただし、昨年度までは、園児の慰問訪問を年数回単発で受け入れる形式であった。そのため、園児たちの歌や演劇を、利用者が受け身で見るため、高齢者と児童がなじみの関係にまで発展しない状況が見られた。また、利用者が、児童に伝えたい、教えたいと考えている、読み聞かせや昔遊びの実施というデマンドの充足は行えていない事も明らかとなった。

上記のような状況から、本年度から、より質の高い世代間交流を実施するため、利用者が、児童施設に出向いて、紙芝居をツールの一つとして行う世代間交流プログラムを企画・実施することとした。高齢者と児童の結びつきを図り、高齢者の有する能力の活用を行い、社会貢献したいという要介護高齢者の一部が持つデマンドへのアプローチとして実施する。

《２．研究(実践)の目的ならびに仮説》

高齢者施設と児童施設の間での世代間交流は、児童による高齢者施設への慰問訪問的な交流が多く、先行研究もそのような形式のもとでの有効性の指摘にとどまっている。したがって、本研究では、要介護高齢者が児童施設に出向く形での交流を実践するとともに、それが高齢者にもたらす影響について、研究することは意義がある。本研究の仮説として以下の２つを設定した.

①世代間交流プログラムとしての紙芝居実演は、要介護高齢者の持つ社会貢献デマンドへのアプローチの手法の一つとして効果がある。

②高齢者施設、児童施設の利用者、園児が相互に出向く形式での世代間交流は、デイサービスを利用する高齢者に、地域における関わりの必要性の再認識を促す効果がある。

無断転載・複製を禁じます。

《3．具体的な取り組みの内容》

対象者は、児童施設での読み聞かせを希望するデイサービス利用者であり、一回に 3、4 人のオープンメンバーである。

実施時間は 10：30～11：00 位。準備、移動、片づけなど考慮すると、所要時間は 1 時間程度である。

利用者から、児童施設訪問の希望者をつのり、世代間交流のため、演者側として、児童に紙芝居を見せに行くことを提案する。実施場所は、保育園と児童センターである。付き添い職員は 2 名程度である。

数名の利用者と職員で「倉田のおばあちゃん一座」として、紙芝居による世代間交流のため、児童施設を訪問する。児童施設からの訪問も受け入れ、馴染みの関係を熟成させる。頻度としては、月 1 回程度である。

プログラムについては、利用者、児童施設、当事業所職員の意見を取り入れ、適宜変更する。 また、毎回、実施後の反省会を設け、内容・日程など打ち合わせ、次回のプログラムを決定する。

《4．取り組みの結果》

園児との交流を単発ではなく、月 1 回程度の継続的な世代間交流として位置づけたことにより、高齢者、児童間で馴染みの関係性が形成された。また、地域の中で役に立つ活動を行う意識により、受動的なプログラム参加ではなく、「次はこの部分をなおすともっといい内容にできる」「こんなプレゼントは喜んでくれるかな」など活動内容、計画に対して、積極的な意識が生まれた。日常のプログラムにおいても、折り紙などの活動に対して、「子供達にプレゼントするために頑張って作ろう」と意欲が高まった。

利用者から、「まだ自分にも出来ることがこんなにあった」「子供が喜んでくれるのが嬉しい」「子供達が喜ぶ事をしてあげたい」「まだまだ、人の役に立てるんだ」との声が聞かれた。

《5．考察、まとめ》

デイサービス利用者が児童施設に訪問する形式を用いた世代間交流により、利用者同士で世代間交流についての会話が増える等、一体感を感じる場面が多く見られるようになった。また、高齢者と児童の施設職員同士の交流による連携の意識が高まり、コミュニケーションの機会が増えた。

世代間交流プログラムは、現在、継続的に実施し、利用者に受け入れられた活動の一つになっている。今後は、さらに発展させ、地域での認知度を上げ、内容の幅を広げて新たな個性を打ち出してゆく必要がある。

世代間交流を、施設内だけで完結するのではなく、地域との結びつきにつなげるため、利用者家族、児童保護者や地域と連携を図り、更なる発展に繋げたい。

《6．倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人、参加職員に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

築山 崇 黒澤 祐介 草野 篤子 角間 陽子 (2007)「世代間交流の実態調査報告 ：京都市・神戸市のアンケート調査より」福祉社会研究

村山陽他（2014)高齢者における「世代間のふれ合いにともなう感情尺度」作成の試み ：高齢者の心身の健康との関連,厚生の指標

《8．提案と発信》

デイサービスは、福祉資源として地域に貢献する役割を担っている。地域の福祉施設として、高齢者施設、児童施設など、他分野施設間での連携により、利用者間交流の活性化、職員間の連携をさらに強化する必要性があると考え、今後も継続的に取り組んでいく。

無断転載・複製を禁じます。